

「ポストコロナ時代の人類の生き方Ⅲ」

素敵な地球人のすすめ

伊藤 俊洋

はじめに

私は、生命科学系総合大学の新入生に、「化学」の講義をしながら、「宇宙における生命の起源とその進化」をテーマに研究活動を行ってきた。その内容は地球上の火山地帯や、深海熱水噴気孔などの極限環境で生息する生物の、細胞膜を構成する脂質の構造と機能を明らかにすることであった。残念ながら、地球上の生命の起源については科学的にまだ説明されていない。最初の生命が地球上で誕生したのか、地球外から飛来したのかもわかっていない。現在は、古い地層から発見された化石の分析などから、地球上での生命現象が、およそ三八億年前に始まったものと考えられて

いる。私は、二〇年前に現役を退いた後、それまでの研究で培ってきた知識をもとにして、「宇宙生命哲学」という新しい概念をまとめ、世の中に広めている。その概要は次の様なものである。

宇宙生命哲学とは何か？

宇宙生命哲学は、地球上に現存する人類の一人ひとり、宇宙における立ち位置と役割を踏まえ、尊厳を持って生きるための哲学である。その根幹をなす考え方をまとめると、次のようになる。

1、全ての生物は、地球環境という閉鎖空間の中で、常に、原子・分子のレベルで組み替えられ、繋

がり、循環している。

2、地球上の全ての生命現象は、化学反応として説明できる筈だが、人類は未だその一部を果たしたに過ぎない。人類は、化学反応の中に大いなるフロンティア（開拓の余地と可能性）を残している。

3、地球上の生命現象は、過去から現在、現在から未来へ循環する、時空を超えた高次元地球環境生命体「宇宙船地球号」と考えることができる。

これらを土台に考えるならば、人類の永遠のテーマである「我々は何処から来たのか、いま何処にいるのか、これから何処へゆくのか」という問いに対しては、「我々は、環境から生まれて、環境に戻る。我々は、時空を超えて、地球上の全ての生物の中を循環している」と答えることができる。人類は、地球上のすべての生物を乗船者とする「宇宙船地球号」のパイロットとして、より良い地球環境の維持・保全を担う地球環境防衛隊員の自覚を持たなくてはならない。

人の死とは、絶望的な奈落の淵に落ちて行くことではなく、この地球上で、新しい環境の一部として生ま



「地球の出」

撮影：Bill Anders、アポロ宇宙船より
1968. 12. 24

れ変わることである。

地球のごみ拾い

海洋のプラスチックごみによる汚染が、地球規模で大きな問題になっている。海岸に打ち上げられた鯨の死骸の胃袋に、重さ四〇キログラムにもなるプラスチックごみが発見された。世界中の海がマイクロプラスチック（MP）とよばれる微小なプラスチックで汚

染され、動物プランクトンを含む海洋生物のすべての体内にMPが取り込まれているらしい。当初、MPは消化されずに体内を通過するだけで、海洋生物に害はないと考えられていた。しかし、PCBやダイオキシンなどの有害物質がMPの表面に吸着されるので、海洋生物の食物連鎖によって蓄積、運搬された有害物質が、私たちの食卓にも届くことになる。二〇一九年六月に開催されたG20会議では、二〇五〇年までに海洋プラスチックごみをゼロにする目標を導入することで一致した。

地球温暖化の元凶になっている空気中の二酸化炭素の増加は、二五〇年前の産業革命が起点とされている。当時は、二酸化炭素濃度の上昇が地球温暖化の原因になるなどとは、全く予想されていなかった。一九三五年に世界初の合成繊維（ナイロン）がウォレス・カロザースによって開発されて以来、地球上でのプラスチック（合成樹脂）の生産量は、二〇一五年には三億八〇〇万トンに達した。安価で壊れにくいことが長所と言えるプラスチックであるが、いったんごみになると分解されることなく、最終的に海にたどり着く。

生分解性プラスチックの開発が進んでいるが、普及には多くの課題が残っており、プラスチック生産量と使用量の削減、リサイクルシステムと、廃プラスチックの国際的な管理体制の構築と強化が喫緊の課題である。

個人レベルでできることはないだろうか。私は、毎月、近隣の道路のごみ拾いをしている。旅先でも、早朝に一時間くらい宿舎の周辺のごみを拾う。世界文化遺産になった一年後の富士山でも、吉田



富士山吉田口登山道5合目から頂上で拾ったごみ（2014年8月4日）

の富士山でも、吉田口の五合目から頂上までの登山道のごみ拾いを行なった。国内だけでなく、海外でもホテルの周辺のごみ拾いを習慣として続けている。環境に散乱しているごみは、どこでもプラスチックごみが大半で

ある。スウェーデンのアビスコ国立公園のハイキングコースにはチリひとつ落ちていなかった。自然を文化遺産として位置付け、身近な自然に対して強い思い入れを抱きながら育った人々の国であることを印象付けられた。人々が、誰しも地球を自分の家、自分の庭と考えることが大切ではないかと考えている。

宇宙から地球を観て考えること

ヒマラヤ山脈や南極大陸など、訪れるのが困難であった地域が、装備や技術の進歩で、かなり手軽な観光地へと変貌した。今や、宇宙が次世代の有望な観光地になろうとしている。月旅行もその一つで、NASAのアルテミス計画は秒読みの段階に入っている。

何を目的に月へ行くのだろうか？ 月から見える景色は、地球と太陽と満天の星である。その中で、人々にひととき大きな感動を与えてくれるのは、我々が棲む母なる地球であろう。人類を含めて、すべての生命を育んできた生命の星を、宇宙空間から自分の目で観る感動は、想像に難くない。宇宙から、漆黒の闇に浮かぶ地球の生の姿を見ることは、人類にとって究極の

望みかもしれない。この経験をした人は人類史上二名いる。それは、およそ六〇年前の米国アポロ計画のチームストロング船長をはじめとするアポロ月面探査隊の人たちである。この経験を、地球上で体験するミニ実験場を作ってみた。天井と床と壁を暗幕で覆い、真っ暗にした部屋の天井から蛍光塗料で青く塗った直径一〇センチメートルの球（地球）を吊るし、その球から二・五メートル離れたところに、黄色く塗った直径二・五センチメートルの球（月）を吊り下げた（図



宇宙から地球を見る擬似体験

は実験場の地球と月の模型)。LEDブラックライトで二つの球を照射すると、漆黒の闇に、青く輝く地球と、黄色く輝く月が宇宙空間の位置関係を縮小した形で三次元の像として浮かび上がってきた。暗黒のしじまの

中に佇む孤独な生命の星を、遙かな宇宙から見ている感覚である。多くの子供たちと、この素朴な感動を分かち合いたい。

宇宙科学の研究は別として、巨額な経費を使い、物見遊山で危険な宇宙に出かける時ではない。地球上で様々な模擬体験をすることにより、地球環境の愛おしさを認識し、地球環境の保全に集中すべき時である。三八億年という長い生命の歴史の中で、ひととき賢く進化したはずの人類が、今、国境を挟んで、血で血を洗う凄惨な戦争をしている。この惨劇を目の当たりにして、我々は、なす術もなく立ちすくんでいる。宇宙から地球を見ると、人類が勝手に引いた国境などはどこにも見えない。人間以外の生物は、国境とは関係なく、自由に地上や海の中を移動している。戦争の指導者たちは、宇宙空間の模擬体験をすることで、自分たちの所業の愚かさに気がついてくれるだろうか。

素敵な地球人のすすめ

このような地球環境生命体の一員として存在する人類は、どのように人生を送ったら良いのだろうか。人

間の一生は、素敵な地球人になる終わりのない練習を続けていると考えよう。素敵な地球人の定義は、人それぞれで違っていいと思う。人生は、それぞれの人が、自分の目指す素敵な地球人像を、生涯かけて探し続けることではないか。急がず、休まず、ゆっくりと、着実に、一歩、一歩、自分のペースで人生を刻んでゆく。その過程で、人と交流し、学び、互いに助け合いながら、自分の人生を思う存分に楽しむことができるという。練習だから失敗も許される。失敗しても、失敗しても、再挑戦が許される。「素敵な地球人になる終わりのない練習」を続けることが、この哲学の最大の特徴である。

今、地球上で続いている凄惨な戦争を止めさせる対策の一つが、「地球人」という概念を広めることだと考えている。

(二〇二四・八・三二)